社会福祉法人 全電通近畿社会福祉事業団

愛&ハート

2025 July
277号

■愛の家
●施設長就任のごあいさつ
●“あたりまえ”が続く毎日であるために
●20年の歩みとこれからのグループホーム
●作業棟建築プロジェクト

■あいハート須磨
●ショートステイへの思い
●利用者様の笑顔

■あいハート離宮前
●北須磨小学校福祉体験学習を受け入れて

■脳梗塞リハビリステーション神戸須磨
●後遺症改善を実生活につなぐ
～ご家族と楽な介助方法を実践練習～

あいハート離宮前入居者様の作品

愛の家

施設長就任のごあいさつ

■施設長　渡會 幸喜

このたび、愛の家の施設長を拝命いたしました、渡會幸喜（とうごうこうき）と申します。

今回このような大役を仰せつかり、身の引き締まる思いでございます。

これまで長きにわたり、現場職員として児童・成人・通所それぞれの生活や日中活動の場に関わることができた経験は、私にとって財産でありかけがえのないものとなりました。これもひとえに皆様の温かいご支援とご協力の賜物と、心より感謝申し上げます。

愛の家では、障がいをお持ちの方々が安心して日々を過ごし、自己の力を最大限に発揮できる環境整備を心掛けています。その力は、適切な関わりや、安心できる場所、そして「あなたならできる」という信頼によって、少しずつ花開いていきます。

利用者の思いに寄り添いながら、利用者一人ひとりが「自分らしく生きること」が実感できるよう、より質の高い支援を目指してまいります。

さて、今年の11月には、児童部の増築及び成人部の作業棟が完成します。児童部は新たに居室（個室）を増床し充実した環境が整います。

作業棟については補助金を活用しようと「みらいの福祉建築プロジェクト」に応募したことが始まりでした。プロジェクトでは、地域共生をテーマに、地域における施設として、今後はより一層、多種多様なサービスの提供や福祉・医療・保健体制が必要とされるなか、施設としての役割や考えが求められています。残念ながら補助金の活用には至りませんでしたが、この4年間で理想とする構想がまとまりました。それは、安心して雨天でも足元が滑らないよう転倒防止のリスクに配慮した作業棟までの導線や、建物内は明るく広々とした空間で運動や歩行訓練ができる環境です。この新しい空間が、愛の家の新たなシンボルになることを願っています。

現在、福祉分野では少子高齢化の進行や業務の重さを背景に、人手不足が深刻な課題となっています。この問題に対応するため、国や自治体、現場ではさまざまな対策が講じられていますが、愛の家でも、職員の定着と新たな人材の確保を目指し、賃金や待遇の改善を進めています。人材の確保では、求人広告及び紹介会社の活用や職員による人材紹介施策を進めています。賃金、待遇では、処遇改善手当の支給や、経験や資格に応じた手当の支給を行っています。業務の効率化に向けては、介護ロボットやICTの導入の検討を進めており、膨大な記録業務などの負担を軽減し、職員がより本質的なケアに専念できる環境づくりを構築していく必要があると考えています。決して、平坦な道ではありませんが、その先に確かな成長と新たな可能性が広がる未来が待っています。

私自身、まだまだ未熟な点も多々ございますが、皆様のお力をいただきながら、よりよい施設づくりに努めてまいります。今後ともご指導・ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

〝あたりまえ〟が続く毎日であるために

■支援スタッフ　深澤　弘史

初めまして。五月より愛の家に入職しました、深澤弘史（ふかざわ ひろし）と申します。どうぞよろしくお願い致します。

前職では高齢者福祉の分野にて、日常生活のサポートをしながら人生のゴールへ向かう高齢者に寄り添ってまいりました。

日々、高齢者福祉に携わるなかで、障がい者福祉の分野にも挑戦したいという思いが強くなり、今回、障がい者福祉の世界に飛び込むことを決めました。その際、愛の家の理念にある〝あたりまえに〟暮すことができるといった内容に感銘を受け愛の家のドアをノックしました。

これまでに経験のないことなので、戸惑いもありますが、利用者さん一人ひとりの表現・訴え・仕草から思いをキャッチすることの難しさを知り、驚きと思考を深める毎日の連続です。

昨日より今日、今日より明日といった支援をどのように展開していくべきなのかを学んでいきたいと思っています。

そういったことを通じて、利用者さん一人ひとりに寄り添い、自身が感銘を受けた〝あたりまえに〟といった内容に一歩でも近づけるよう先輩職員から指導を受け自己研鑽にも励んでいきます。

私は、理念の一つでもある経過施設としての役割に貢献していきたいと思っています。一人でも多くの利用者の皆さんを地域で〝あたりまえに〟暮らすことができるよう、サポートし利用者の皆さんとともに成長していきたいと思っています。

最後に、私が理念の中で最も感銘を受けた、〝あたりまえ〟を目指す支援として利用者さん一人ひとりの自立を促していけるよう、日々の利用者さんの観察を行い、どんなことに興味を持ってくれているのか、楽しいと感じてもらえるのか、どのようにすれば苦手なこともチャレンジしてくれるようになるのか、繰り返しにはなりますが、思考を深め支援力の向上を行っていきたいと思います。

20年の歩みとこれからのグループホーム

■グループホーム主任　山口　真吾

愛の家のグループホームが開設されて、今年で丸20年になります。

私は異動でグループホームに関わるようになってから8年目になります。私は常に現場の最前線にいるわけではありませんが、日々届く報告やスタッフの声、利用者さんやご家族とのやり取りを通じて、このホームの「今」と「これから」を考える毎日です。

20年の間には、たくさんの変化がありました。建物は年季が入り、利用者さんもスタッフも一緒に年を重ねてきました。借家という事情から、設備面のトラブルも少なくなく「また水漏れか…」「今度は玄関の鍵か！」と、対処に追われることもあります。

こうした細かな積み重ねが〝住まいとしての安心〟を支えているのだと感じます。

利用者さんの高齢化が進む中、支援の内容も変わってきました。

体調への配慮、通院支援、福祉と医療の連携等、現場では世話人が一つひとつに向き合ってくれています。

一方で、支える側もまた高齢化が進み、人手不足や世話人の確保、専門性の向上といった課題は常に頭から離れません。現場の負担をどうすれば軽減できるのか、制度の中で何が可能なのか、悩ましい日々です。

今年度の事業計画では、「課題解決の迅速化」を掲げました。解決を急ぐというよりも、課題に向き合う姿勢を組織として途切れさせないためのキーワードです。すぐに答えが出ない問題もありますが、「動きながら考える」ことの大切さを実感しています。

この20年間、現場の力に支えられながら、いくつもの課題を乗り越えてきました。すべてが理想通りにいったわけではありませんが、試行錯誤の中で積み上げてきたものは確かにあります。

グループホームという〝暮らしの場〟が、これからも安心して続いていくために、現場の声に耳を傾け、利用者さん、またご家族とのつながりを大切にしながら、一歩ずつ歩んでいきたいと思います。

作業棟建築プロジェクト

■事務主任　森口 威

以前より各広報誌等でお知らせしております「愛の家新作業棟」ですが、いよいよ完成に向けて、日々着々と進んでいます。

私はこの新作業棟建築のプロジェクトに参加させていただいております。

毎月第1木曜日に、設計事務所、建築会社、愛の家のプロジェクトメンバーが集まり、建築の進捗等の確認と共有をしています。

本プロジェクトは、ただ建築に携わるだけでなく利用者の皆さんが安心、安全に過ごせる環境づくりを第一に考え、現場での支援者の観点も交え、建物の設計、建物の材質、空間構成など細部にわたっての議論を重ね、完成に向けて皆で真剣に取り組んでいます。

さて、福祉施設は単なる建物として建築するのではなく、利用者さん一人ひとりの生活の場所であり、職員にとっても働きやすさを左右する職場でもあります。

だからこそ今回のプロジェクトの重要性を改めて実感していますし、愛の家の未来に向けた土台を今自分たちが作っているという誇りも持ちながら進んでいます。

6月20日に上棟式を行い、11月には完成予定です。

完成したのちは利用者さんの日中活動の場として、今よりももっと充実した活動を提供していけると思いますし、職員にとっても働きやすい場所になると思います。

それと同時に地域交流やボランティアの皆さまとのコミュニティとしての役割も担っていく建物でもあります。

利用者の皆さん、関係者、職員の皆さん、完成をお楽しみに！

あいハート須磨

ショートステイへの思い

■ショートステイ相談員　森口 正和

初めまして。4月よりあいハート須磨の特養・短期入所部門でショートステイ相談員に着任しました森口正和と申します。20年の介護経験のうち、ほとんどをショートステイ相談員として力を注いで参りました。今も昔も変わらず需要の大きいこのサービスへの私の思いは強く、着任してからも多くのご相談に、日々やりがいを感じております。

ショートステイは、その名の通り介護者の入院や冠婚葬祭、旅行など短期利用もあれば、在宅での生活が困難で、特養入所が必要ですが、当面空きが無くショートステイを継続して待機するといった長期利用まで様々です。これらの様々なニーズの中でも多くを占めるのが、介護者の介護と仕事の両立やレスパイトといった定期的な利用です。

そのことからも、このサービスはできる限りご自宅で生活していただくという最大の目標のプロセスにおいて、ご利用者またご家族にとっての拠り所であり、重要な位置づけと言えます。

一方で、サービス提供側の現状はどうなっているかというと、須磨区の要介護（要支援）認定者数は約10,000人です。この人数に対する須磨区内の短期入所生活介護事業所の総ベッド数はたった181床しかなく、常に空きがある保証も無いことからも、住み慣れた地域で生活し続けることがどれだけ困難かがお分かりいただけるかと思います。

この数少ない社会資源の中で、一人でも多くのご利用者へのサービス提供が私共ショートステイ部門の大きな役割であると思っています。

そのために、まずはご利用者の代弁者であるケアマネージャーに対して、より「あいハート須磨」を知っていただけるように情報を常に発信し続けることで、まず私の顔を思い浮べてもらってご相談いただけるような関係性を築くことで、より多くのご利用者へのサービス提供の機会を作ろうと考えております。

心機一転、頑張っていく所存でございますので、よろしくお願い致します。

利用者様の笑顔

■居宅介護支援事業所
ケアマネージャー　余田　恵

私はケアマネージャーの職に就いて、今年の8月で8年になります。この仕事をしていてやりがいを感じられるのは、利用者様と家族様の笑顔が見られるときです。最近、最高の笑顔を見せてくださったお二人についてご紹介したいと思います。

そのお二人は仲の良い要介護1の姉妹です。姉妹共に結婚歴はなく、お姉様は会社を経営、妹様は会社員として定年まで勤められたまじめな方々です。お二人とも認知症を患っておられ、お姉様は軽度ですが、円背で歩行状態が低下しておられます。一方、妹様の認知症は中等度ですが、姿勢が良く歩行もしっかりとしておられます。出かけるときはいつも一緒、お風呂も一緒、夜は1つのセミダブルベッドで一緒に眠るほど仲が良い姉妹です。お姉様の口癖は「あの子(妹)を見てやりたいから頑張らなあかんねん」です。お二人で足りない部分を補い合って、暮らしておられますが、周囲からみると危うい部分がたくさんあり、支援が必要な状態でした。しかし、お二人とも病識が無く、介護サービスの導入が難しい状態が続いていました。

ある日、妹様が自宅で転倒し、入院されました。お姉様は心配で不安になり、友人や私に「妹は大丈夫？私はどうしたらよいの？」と頻回に電話をかけられるようになりました。面会の方法がわからず、毎日病院の前を行ったり来たりすることもありました。入院して1月ほど経った頃、病院より退院の打診がありました。お二人の認知症の程度と妹様の状態から「姉妹での生活は難しいため、施設入所への道筋がつくのであれば退院できる」とのことでした。

そこで有料老人ホームへの入所を目指すことになりました。入所先が決まるまで待ちきれないお姉様は不穏が強くなり、電話の頻度が増し、時には泣きながら電話をしてこられました。そこで、急遽、姉妹一緒に過ごせるショートステイを調整させていただきました。施設の計らいで1つのお部屋にベッドを2つ入れて対応くださいました。寝食を共にする生活に戻り、お二人とも最高の笑顔で私に「とってもしあわせ」とおっしゃってくださいました。その笑顔がとても素敵で私も幸せな気持ちになりました。これからもご利用者様、家族様の笑顔に出逢えるように仕事に取り組んでいきたいと思います。

あいハート離宮前

北須磨小学校 福祉体験学習を受け入れて

■介護主任補佐　東野　美果

六月十三日、今年も前年度に引き続き北須磨小学校の五年生の子供たちを受け入れて福祉体験学習を実施しました。

北須磨小学校は当ホームから一番近い小学校であり、災害時の緊急避難先に指定されています。

コロナ禍前は年に一度、小学校から子供たちが来てくれて劇やクイズ、昔遊びなどでご入居者様と接する懇親の場がありました。

コロナ流行時は感染防止の為、直接の関わりはできなくなりましたが、当ホームの職員が小学校へ赴いて福祉の出張授業を行い、子供たちからは当ホームへビデオレターや手作りのプレゼントを贈っていただく交流を続けていました。こうしてずっと続けてきた関係により、今年も体験学習に来てくれたのです。

午前中と午後に分けて、児童六〇名を受け入れました。

まずは丸毛主任がホームの紹介、ご入居者様の暮らし・業務について講義をしました。

多職種の職員が専門性と責任感を持ってご入居者様の生活を支えていること、また、講師の先生やボランティアの方々の助けがあってアクティビティが充実していること、支援には大変なことや悲しい別れもあるけれど、「ありがとう」と言ってくださることが職員にとって嬉しいという内容でした。子供たちが真剣に耳を傾けてくれたのが印象的でした。後半は福祉機器や道具を実際に使って体験をしてもらいました。

元気いっぱい、笑顔や質問もいっぱいでした。この学びは子供たちに福祉への理解をもたらし、あいハートという縁のもと地域や人と共存し未来へ繋いでいくものであると信じています。私にとっても初めて受け入れへの関わりで、大変有意義な一日となりました。

ご支援をくださった方々

《4月》

マッチングギフト

NTT西日本グループ 様　（計1件）

《5月》

寄付金

NTT労働組合退職者の会 京都支部協議会 様　（計1件）

後遺症改善を実生活につなぐ
～ご家族と楽な介助方法を実践練習～

脳梗塞リハビリステーション神戸須磨 センター長 伊藤 正憲

写真1

写真2

写真3

写真4

半年前、脳出血の発症から1年5か月が経った重度左片麻痺例のリハビリを開始しました。58歳男性でお姉さまと2人暮らし。回復期病院を退院して10か月間、一度も歩いたことがなく、1人で立ち上がることもできませんでした。トイレでの排泄やベッド移乗など、身のまわりのことは全てお姉さまの全介助でした。

非麻痺側の右側だけで踏ん張る、引き込むという身体の使い方が定着してしまっていた半年前。麻痺側下肢を支えに使って立つためには、麻痺筋に促通と抑制をかけるハンドリングが必要でした（写真1）。

週2回のリハビリで麻痺側機能の改善と動作練習に取り組み、殿部離床を軽くサポートすると1人で立ち上がることができるようになりました（写真2）。お姉さまは半年の経過の中で、介助量の軽減を実感されていますが、より楽にできる介助方法を実践的に練習しました（写真3）。車いすへの移乗も、非麻痺側だけに頼らず、麻痺側を支えに使う身体の使い方を運動学習しています（写真4）

今回紹介した記事の内容はリール動画でインスタグラムに投稿しています。QRコードから脳リハのインスタに入り、（写真5）のサムネイル画像をタップして実践練習を映像でご覧ください。

写真5

こちらの
QRコードから▶

「皆様の声」受付窓口

全電通近畿社会福祉事業団では、社会福祉法第82条の規定に基づき、利用者家族の皆様等から「苦情」やご意見に適切にお応えするための体制をとっています。面接・電話・書面等どのようなかたちでも結構ですので、遠慮なく、お気軽にお申し出ください。

- 愛の家 …… 072-494-0123
- あいハート須磨 …… 078-737-2525
- あいハート離宮前 …… 078-731-2130
- 法人本部 …… 06-6458-5723

【発　行】
社会福祉法人　全電通近畿社会福祉事業団
〒553-0003　大阪市福島区福島 3-1-73
TEL 06-6458-5723
Website　https://www.zendentu-kinki.jp
Facebook　http://www.facebook.com/zendentukinki
E-mail　jigyodan@silver.ocn.ne.jp

【発行人】
理事長　橋本 寿樹